困難な課題をかかえる子どもを見つめる
＝M君との一学期から＝

1　四月当初のM君

私がM君と初めて出あったのは、新学期始業式だった。それまでにM君の名前を耳にすることはあったが、どんな子なのかは、全く知らなかった。

始業式の間、M君は始終周りの子どもにふざけかかってばかりいて、その落ち着きの無さは特に目についた。式を終えて新しい教室に入り、担任としての自己紹介をした時、M君からすぐかえってきた言葉は、

「先生、いらんで。」

だった。そう言い放ったM君の目は、三年生とも思えないすさんだ目だった。これが、私とM君の出会いだった。

始業式もすみ、日々の学校生活が動き出すにつれ、M君の気になる行動も次々に目につくようになった。

まず気になったのは、自己中心的・衝動的な行動である。

朝、教室に来ても、かばんは机の上においたまま。朝マラソンにも出ないで、私の机から勝手に持ち出した虫めがねで遊んでいる。

理科の時間、外へ観察に行くと、もう次の時間になって、みんな教室にもどっているのに、一人帰ってこないで、ザリガニ取りをしている。

また、別の時間、たまたま職員室にあった支援学級が作った草もちを見てほしくなり、一時間職員室ですねて帰ってこないということもあった。

ある日、M君が矢じりの模型をもって遊んでいたので、どうしたのかと聞くと、「わんぱくの森に落ちてたん。」という。しかし、それは嘘で、階段横の社会科標本から持ち出していたことが後でわかった。「ほしかった」のだと言う。

平気でガムをかみながら登校してくるという日も何度かあった。

自己中心的・衝動的行動のうらがえしとして、「……ねばならない」的活動への意欲のなさもひどく気になった。

決して書く力がないわけではないのだが、漢字練習や作文など、書く作業を伴う学習を嫌い、よほど励ますか、強制しない限り取り組もうとしなかった。算数も、まだ九九がおぼえきれていないせいもあって、計算問題がきらいで、横について見ていてやらないとすぐ遊んでしまうという状態だった。

基本的生活習慣の不十分さも目についた。

そうじの時間になっても、弁当の食べかけのままが机の上に放ってある。

放課後の教室をのぞくと、必ずM君の上靴や持ち物が教室のあちこちにころがっていた。

学校からの連絡プリントが、机やかばんの中につっこんだままになっている。私が点検しなかったばかりに、家庭訪問日の連絡が届いていないということもあった。

さらには、いたずら行動である。

新学期が始まってしばらくすると、教室内で、子どもの持ち物がなくなったり、他の子のと入れ替わっっていたり、ということが頻発するようになった。誰がやったのか不明な部分も多いが、そのうちのいくつかは、M君のしたことだった。どうしてそんなことをしたのかと尋ねると、「困らせるのがおもしろい。」という。

こうした様々の気になる行動が一通り担任の私に見えてきた四月の下旬、保育園での喫煙事件・家の金持ちだし事件が起きたのだった。

M君の家は、四八歳の父親との父子家庭である。M君が一年生の時に両親が離婚し、以後、長男夫婦と同居して、義姉がこれまで母親代わりで世話をしてきた。M君は「おねえちゃん」と呼んでいる。

父親は、昼間は営業関係の仕事をし、夜はスナックの経営もしていたため、ほとんどM君には関わってやれていなかった。M君の家での暮らしは、ぽつんと一人テレビを見ているという寂しいものだった。

M君が度々問題行動を起こしてしまう背景には、こうした家庭での孤独な状況がある。

3　父親との話し合い

M君のことについては家庭訪問の際にていねいに聞くつもりでいたが、保育園での喫煙事件が明るみに出たことで、急遽父親に出会うことになった。私が聞いていたところでは、父親は全くM君を放任しているということだったが、出会って話してみると、予想に反してM君に対する父親としての責任を強く感じていることが言葉のはしばしからうかがえた。

「Mのことは、８０パーセント以上、自分に責任があると思っています。いろいろ問題を起こすのも、寂しいのが原因やいうことはわかってるんです。いろいろ考えて、スナックの方は四月いっぱいで閉めることにしました。できるだけMといっしょにいる時間を作ろうと思っています。」

そんな話を聞いて、本当にありがたいと思った。

父親と話をしている間、M君は、横にすわっていたが、ひどく父親におびえているようなそぶりがみえた。聞くと、やはり、小さいころから、かなりひどくおこってきたということだった。

それで、今のM君には、力でおさえつけるようなことをしても無意味であるばかりでなく、将来的にはむしろマイナスであることを話し、まず十分M君の話を聞いてやることを大事にしてほしいと頼んだ。

次の日は参観日だった。M君の父親も来て、一時間M君の姿をみておられた。その日は、「雲」という詩の授業をしていた。四月始めでまだ落ち着かない子ども相手に悪戦苦闘の授業だったが、「先生の授業を見ていて、おこらんと子どもに納得させていくことは、大事やなあと思いました」という感想を話してくれた。

こうして、父親とも話し合いの場を何度か持つことができ、良い方向に動きだしたかに見えたのだが、現実はそれほど甘くはなかった。金の持ち出しといった極端な問題行動こそはなくなったがM君の様々な気になる行動は、それ以後も毎日のように続いた。

しかし、そのいちいちを父親に伝えることはやめた。伝えたところで、父親を困惑させ、結果的にM君をどなりつけるだけのことにしかならないのは目に見えていたからである。

ここから先は、担任である自分の課題と受け止め、私としてできることを見つけていこうと考えた。

4　M君に関わっての私の取り組み

①M君の良さを見つけることから出発する

「先生、いらんで。」といわれるような関係の中では、どんな指導の言葉もM君には入らない。私の言葉を素直に受け止めてくれるような信頼関係をM君との間に作り出すことを当面の課題と考えた。

見かけは否定的な姿ばかりが目につくM君だが、日々の生活の中で、いくつかのM君の良さも見えてきた。

まず、意外だったのは、M君がとても読書好きだということ。ゆとりの時間を読書に当てた時など、物も言わず食い入るような姿で本を読んでいる。

あるとき、見ていると、学級文庫の本棚から「ハチ公ものがたり」「かわいそうなぞう」の二冊を持ってきて、二冊とも無心に読んでいた。そして、読み終えると、ほっとためいきをついて、かたわらにいた女の子に「これ、二つともかわいそうな話やで。」と語りかけるのだった。そんなM児はとてもかわいく見えた。

また、集中力の弱さ、根気のなさが気になるM君だが、学習の理解力・思考力は決して劣っていないことも毎日の授業の中で見えてきた。国語の授業では、鋭い読みを出してくることがよくあっ

たし、苦手の算数にしても九九は不十分だが、それ以外では、何ら問題なく、文章題でもけっこうこなせる力があった。

もう一つ意外だったのは、案外働き慣れているということだ。全校除草作業があったとき、ふだんの掃除の時間のM君から想像して一〇分と持たないのではないかと思っていたところが、黙々と草むしりを続けている。「ようがんばるなあ」と言うと、「家の庭の草むしりも時々やってる」というのだった。

サツマイモ植えの時も、別にこちらから強制したわけでもないが、植え付けから水やりまで一生懸命やっていた。

こういうM君の良さが見えてくるにつれて、M君に対して何事かしてやれそうな展望も漠然とではあるが開けてくるような気がした。

②M君の力を確かにに引き出し高める仕事

M君の良さをもっとくっきりさせたい。そのためには、とにかく具体的な学習活動の中でM君の力を引き出し、高めることしかない。そんな思いで一学期の指導にあたってきた。

これといった具体的な成果は何もないが、やってみたことをいくつか書いてみる。

①M君を授業の中心に

M君の力を確かに引き出すには、授業にきちんと参加していることが前提になる。集中力の弱いM君を逃がさないよう、M君の発言を材料にして授業の課題にしていくことを意図的にやってきた。

例えば、次の授業の場面のようなことを。

> はまべのいす　　山下　明生（はるお）
>
> だれがおいていったのか、すなはまに、いすがぽつんとありました。
> ところどころペンキのはげた、白いいすです。
> いすは、だれかをまつように、ずっと海を見ています。

＝【授業記録】＝

T　じゃ、みんなは、どのくらい読んだことが頭に入っているのか、先生いくつか問題を出します。まず、ここは、どこでししょう。

C　（一斉に挙手）

M　病院とすなはま。

香里　ひろ君のいる場所はベッドの上で、いすは、すなはまのところ。

T　すなはま。すなはまってことは、

淳　海　。海のすなはま！

T　ほうすると、じゃ、黒板に書いてみるぞ。（黒板に海・すなはまを書く）で、ひろ君は、どこにいるって？

C　口々に「そこそこ」と指さす。

T　病院ってどこに書きましょうね。（病院と病室のひろ君を書き加える）

淳　ひろ君はそこでねてやってな、すなはまであそんでやるのを見てやるの。

（ビデオにとっているのが、うれしくて、授業もそっちのけではじしゃぎまわっている男子7、8人あり。

そして、頼みもしないのにMは、黒板に出てきて、いすの絵を書き込む）

T　Mくんが、ここにいすがあるって、いすをかいてくれました。
雄介　反対向いてるで。
Cほんまや
（こんどは、敬志・和生・亮の3人が走り出てきて、イスの絵を書き直している）
T　すごくいい問題がでたね。
Mくんは、最初こっち向きのいすを書いた。ゆうすけくんは、「いや反対やで。こっちむきやで」て言いました。
ひょっとしたらまだ、こんなんがあるかもしれんよ
（4方向のイスの絵をかく）
T　さあ、文章をちゃんと読むと、このいすは、どっちむきにあったのか、わかるよ。
Cあっ、わかった！
T　ヒントは、ここ（最初のページ）にある。
C（8割ぐらいの子挙手）
T　どれやと思うか、手上げて。
①と思う人……3人
②と思う人……0人
③と思う人……ほとんど全員
④と思う人……1人
では、どうして、こっちむいたる、てそんなことが言えるの？
C　ハーイ！
T　じゃ、だれに聞いてみようかな。はい、じゃ幸代ちゃんに聞いてみよう。
幸代　「いすは、だれかをまつようにずっと海を見ています。」
T　ほう。書いてみよう。（板書する。）
はい、しょうこになるのは、この中の特にどれですか。特に大事な言葉は？　智保ちゃん。
智保　「だれかをまつように」
敬志　ぼくは「海を見ています。」
海を見ているからな、こっちむけになる。
憲孝　いすが海を見ているから、こっちの方になる。
T　まだ、他のところから考えた人ある？
和樹　「だれかをまつように」
T　ほれ、和樹君がすごいことといった。
「だれかをまつように」ここからでもわかるんやでって。
Cうん
T　賛成する？（うん！）えらいね。ここからでもわかるもんね。だれか、うまいこと言える人ない？
M　うんとなあ、だれかが、すわってくれへんかまってるの。
T　いすが、だれかすわってくれないかなあってまってる。
和生　（つぶやき）一人やでな、さびしいで、だれかすわってくれへんかなあってまってやるの。
T　おっ、金くんがとってもええことといわったぞ。
和生　うんとなあ、前からぜんぜんすわってくれやらへんかったでなあ、すわってくれやる人待ってはったん。

――後略――

②M君自身に力の伸びを実感できるものをつくる

「がんばってやったら、ぼくもけっこうできるんだなあ。」という体験をくぐらせたい。それが根気のないM君を少しは変える力になるのではないかと思った。

M君は、書くことが嫌いで、毎日取り組んでいる五分間日記も、書かないまま終わってしまうか、書いても一行というような状態だった。たとえば、こんなふうである。

歯のけんさ
きょう歯のおいしゃさんがきた　おいしゃさんわ、BのCといろいろいってさいごにぼくのときわ、6あるといった。

にっき
ぼくがさくぶんちょうをなくしたら　せんせいがさくぶんノートをくれた
ぼくは心の中でうれしかった

あんまりかけなかってもおこらんといてや。きょうのさんすうわたのしかった

M君のすなおな思いは、この短い一文にも読み取れる。だが、一学期に一度ぐらいは、書く力を目一杯出し切るような文章も書かせてみたいと思ってやったのが「太郎坊山の遠足」の作文である。

「九百九十七だんのかいだん」
S・M

のぼり始めは、かいだんばかりだった。登ってもかいだんがつぎつぎとみえていた。（ゲー）と思った。えらかったので、なにもいわずに登った。だいぶんいくと、とりいがたくさんならんでいて、少しすずしかった。もうちょっといくとこいずみ先生のばしょについた。こいずみ先生が、
「みんな登るのはやいなあ。」
といいました。
「つかれたあ。」
といいました。つぎつぎのぼったら、おおきな岩が二つあった。ぼくは、ウソをついたことがあるけどはさまれなかった。
「たかいなあ。」
といった。少しおりるとかいだんが少しあった。おりるとあながあった。ちかくでみると、あなの中にあながありました。おみやさんの人が
「むかしからつたわるりゅうのあなだ。」
といっていました。のぞいてきもちわるうと思いました。

内容的にはたいしたことはないが、M君がこれだけの文を書いたのは初めてだった。M君の書くことへの抵抗はこれで消えたわけではないが、こういうことの積み重ねが力になるのだと考えている。

がんばってやればできることを実感させるものとして、大事にしたのは体育である。M君は見かけの元気さとはうらはらに案外運動能力が低い。ドッジボールも下手で、みんなの遊びでドッジボールをやってもその中に入らずべつのところで遊んでいる。それで、しばらくM君相手にキャッチボールの特訓をしてやった。M君はそれをたいそう喜んで、少し受けることも投げることも上手になってきた。ちょっとそういうことをしてやっただけで、喜んでみんなのゲームの中に入っていくのだった。

水泳も、自分勝手なことばかりして、こちらの指示を少しも聞かないのでいつまでたっても泳げなかった。全体の指導で手いっぱいなのでほっておくしかなかった。

かなりの子が泳げるようになり、少し個別指導のゆとりが生まれてきたところで、M君をつかまえて、強引にこちらの指示どおり練習させてみた。すると、ドル平でいきつぎが数回できるようになり、一三メートル泳げてしまった。その後、少し私の指示も聞くようになり、自分でも二五メートルを目標にしてがんばるようになった。

終業式の日、「一学期がんばったこと」という題で書かせたとき、M君は、やはり一行だったが

水えいをがんばって、小プールをおよげるようになってうれしかった。

と書いていた。

二学期以降、M君がぐんぐん変わっていったということでは全く無かった。ただ、一学期の始めのような姿は無くなったとは言える。３学期の頃の授業ビデオには、穏やかにみんなの発言を聞いているM君の姿が映っている。